「英雄像のエスノグラフィー
―現代パレスチナ社会における投獄体験と囚人の表象-」

東京外国語大学大学院　博士後期課程
南部真喜子

本報告では、イスラエル当局に逮捕され、刑務所に収監されているパレスチナ人囚人にまつわる英雄像の形成について考察する。とりわけ、若年層の逮捕が近年とくに顕在化する東エルサレムのパレスチナ人コミュニティにおいて、若者の逮捕や投獄体験が英雄像や「大人になること」とどのように関係しているかについて検討する。

イスラエルの占領下にあるパレスチナ社会では長らく、占領支配に対する抵抗を通じて投獄されることは、それ自体が一種の通過儀礼とみなされてきた。被占領地住民による民衆蜂起、第一次インティファーダ期（1987～1993 年）には、投獄体験や尋問中に受ける傷が成人になるための象徴とされたことや、刑期を終えてコミュニティに復帰した囚人たちが尊敬や社会的地位の上昇をもって迎え入れられたことなどが先行研究でも指摘されている（Peteet, 2000; Rosenfeld, 2005）。現在でも、パレスチナの街中には殉教者と並んで囚人を記念する多くのポスターが掲げられ、名前には「英雄（al-baṭal）」の敬称が添えられる。

その一方で、近年のパレスチナ社会は、民衆運動の帰結として始まった和平交渉がとん挫し、独立国家建設というかつての期待が果たされないまま、抵抗運動も停滞している状況にある。なかでもイスラエルの行政下に置かれている東エルサレムでは、パレスチナ自治政府のあるヨルダン川西岸地区のパレスチナ社会から隔絶され孤立が深まる一方で、市のユダヤ化政策による東西エルサレムの統合が進められている。生活空間を守ることが切実な問題として存在する中、頻発する若者とイスラエル兵士との衝突と並行して、イスラエル市民権を申請しヘブライ語を習得するといった新たな現実への対応も見られるようになった。

このような社会の変化を背景に、抵抗の象徴としての囚人の英雄像は、現代のパレスチナ社会においてどのような変更を余儀なくされているであろうか。本報告では、2015 年から 2017 年にかけて行った実地調査をもとに、逮捕経験者とその家族や関係者らへの聞き取りや参与観察を通じて知り得た個別事例を織り交ぜながら、抵抗と通過儀礼がかつてほど強い結びつきを持たなくなった今日の東エルサレムコミュニティの一端とその背景を、若年層の逮捕経験から解明することを試みる。そのうえで、英雄像が逮捕経験者や社会に与える役割の変化についても考察する。